

東海道は、江戸の日本橋から京の三条大橋までの125里(491km)の街道である。刈谷市内はほぼ国道1号線に沿っている。池鯉鮒宿と鳴海宿の間にあたり、休憩のための立場(たてば)として数件の茶屋が賑わい湯茶・酒・食事などが旅客に提供されていた。

①富士松駅

大正12年4月に愛知電気鉄道が有松裏・新知立仮駅間の開通に伴って開設された。開設当初は今川停車場といわれたが、昭和27年に富士松駅に改称された。

②お富士松

桶狭間の合戦で今川義元が戦死すると、今川勢は残らず退却した。このとき今川勢は旅人を織田信長のまわし者として切り殺してしまった。村人は旅人をふびんに思い、丁寧に葬り、そこに1本の松を植えた。これが富士松という地名の由来にあたる松である。富士松は昭和34年の伊勢湾台風で枯れてしまった。これは新たに植えたもので、当初は駅より約200m南東の位置にあった。

③乗蓮寺

真宗大谷派の寺院で、江戸時代前期の草創とされる。

④乗蓮寺のシイ

樹齢850年と推定される。幹の根元に大きな空洞があって、昔、タヌキが棲んでいたと言い伝えられる。伊勢湾台風により幹の大部分に損害を受けたが、現在は樹勢を回復し、実も付き始めている。市指定文化財。



⑤馬頭観音

顔の上に馬の頭をいただき、怒りの相をしている観音を馬頭観音という。馬の守り神として江戸時代からひろく信仰されてきた。参勤交代のとき、道中で病に倒れた馬を供養するために建てられたものといわれる。

⑥一ツ木弘法道標

一ツ木弘法の縁日には、この道を通って西福寺へお参りに行く人の列が絶えなかったため、この道を弘法道と呼ぶようになり、「一ツ木こうほうみち」の道標が建てられた。

⑦乗願寺

天正15年(1587)の創建で、はじめ地藏寺といい、はじめは真宗を内に、表向き浄土宗としていたが、のち真宗に改めた。

⑧愛宕山

むかし1人の若者が、ここに生えていた大きなエノキの

⑮密蔵院

本尊は弥勒菩薩、当初真言宗で現泉田町にあった。正徳4年(1714)木崎禪師により臨済宗に改宗され、のち長寿寺(現名古屋市)2世が現地に移し、大師堂と共に再建した。大師堂には流涕大師が安置されている。三河三弘法の第3番霊場となっている。



⑯西福寺

寛正年間(1460~1466)阿弥陀如来を本尊とする雲涼院(天台宗)と弘法伝説にある「見送り大師」を本尊とする西福寺(真言宗)の両寺が兵火により焼失したため、草堂(跡地を蓮台と呼ぶ)に両寺の本尊をまつっていた。慶長元年(1596)両寺を合併再興し現寺名となり、のち曹洞宗に改宗する。三河三弘法の第2番霊場。

⑰法林寺

蓮現山と号し、開創は宝暦元年(1751)。本尊は阿弥陀如来である。蓮糸で織られた「阿弥陀如来画像」は室町末期の作で市指定文化財である。蓮如上人の第2の息女見玉尼公が蓮糸で織った布に蓮如上人が如来像を描いたものといわれる。

⑱一ツ木駅

大正12年4月に愛知電気鉄道が有松裏・新知立仮駅間の開通に伴って開設された。三河弘法の参拝者でにぎわう。

○境橋(富士松駅より約1.1km)

三河と尾張の国境を流れる境川に架る橋。江戸時代では、尾張側が板橋、三河側が土橋という継橋で、尾張藩と刈谷藩の勢力関係を示しているといわれる。現在の橋は平成6年3月に竣工したものである。

○今川八幡宮(富士松駅より約270m)

元禄~享保期(1688~1736)の創建といわれる。品陀別尊(ほむだわけのみこと)をまつる。もとは田地池にあったが、県道開削のため遷座した。

○今岡神社(馬頭観音より約500m)

天正17年(1589)勧請。末社として熱田皇社、御鋸太神社、津島天王社、秋葉宮社、白山宮社、山神社がある。

○阿弥陀堂

阿弥陀仏の石像が安置されている。阿弥陀は西方にある極楽世界を主宰するという仏で、衆生救済のため48願を発し、成就して阿弥陀仏になったといわれる。

根を切り取ったところ、にわかには歯が痛み苦しんだが、家の仏壇に祈ったところ痛みがなくなった。そこで、京都から愛宕神社の分神を移してここにまつたので、村人はここを愛宕山と呼ぶようになったといわれる。

⑨ひもかわうどん

江戸時代の東海道の紀行文にも川うどんの記事がよくでてくる。この名物うどんは「平うどん」で、これが東に伝わって「ひもかわうどん」として現代に残り、今でも東京ではうどんのことをひもかわとよぶ。名古屋のきしめんも形は同じ平うどん、いも川うどんが西に伝わったと考えられるが、その名の由来は明らかでない。

⑩洞隣寺

曹洞宗の寺で、天正8年(1580)の開山といわれ、開基は水野重忠とされる。寺の入口にある常夜灯は、寛政8年(1796)の年号が刻まれている。

⑪中津藩士の墓

寛保2年(1742)豊前国(大分県)中津藩の家臣が帰国途中、今岡村付近で突然渡辺友五郎が牟礼清五郎に斬りつけ2人も亡くなったため2人の遺骸は洞隣寺に埋葬された。ところが2人の生前の恨みからか、いつのまにか反対側に傾き、何度直しても傾き、村人は怨念の恐ろしさに驚き、墓地を整理して改めてあつく葬ってからは墓は傾かなくなったといわれる。

⑫めったいくやしいの墓

昔、洞隣寺の下働きに容貌は悪かったが気立てのよいよく働く娘がいた。あるとき高津波村の医王寺へ移ったところ、この寺の住職に一目ぼれした。しかし、青年僧は仏法修行の身であり娘には見向きもせず寄せ付けなかった。娘は片想いのため食も進まずついに憤死してしまった。洞隣寺の和尚はこれを聞いて亡骸を引き取って葬ったが、この墓石から青い火玉が浮かび上がり油の燃えるような音がしたり「めったいくやしい」と声になったりして火玉は医王寺の方へ飛んで行ったといわれる。女の情炎の恐ろしさが語り継がれている。

⑬十王堂

十王といっってあの世で亡くなった人を裁く10人の王をまつる堂で、各地にあった石地藏が集められている。

⑭一里塚

一里塚は街道の1里ごとに土を高く盛ってエノキなどを植え、里程の目標にしたものである。国道1号線の開通によって当時のおもかげはない。



○庚申塚

60年に1回めぐってくる庚申(かのえさる)にあたる年に大祭を行い、1つずつ建てられた。もとは24カ所にあったといわれるが、今は1カ所にまとめられている。庚申信仰は、中国の道教の守庚申に由来する禁忌で、平安時代に伝わり、江戸時代に盛行した。

○諸輪観音発祥の地(洞隣寺から約300m)

今から千百年前のある日漁師の網に1体の観音像がかり、人々はこの観音像を丁寧に洗い清め、お堂をたててまつった。その後諸輪村の寺にまつられ、その寺を観音寺と呼ぶようになった。今でも諸輪観音まで代参するという。

○枝の渡し(洞隣寺から約300m)

江田なし川に吹戸橋がかかっているが、橋のかかる前は

# 刈谷市

## 歴史の小径

東海道(今川・今岡・一里山・一ツ木)



今川町付近

### 文化財愛護シンボルマーク



ひろげた両方の手のひらのパターンによって、日本建築の斗拱(ますぐみ)のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財という民族の遺産を、過去、現在、未来にわたり、伝承していく愛護精神を象徴している。

渡し船が通じ、枝の渡しと呼ばれた。

○一ツ木神明社(西福寺から約400m)

旧村社。享和元年(1801)、文化8年(1811)、文化10年(1813)の常夜灯がある。

○生駒甚兵衛碑

生駒甚兵衛碑は生来義侠心に富み、30年間にわたって庄屋を勤めた。当時一ツ木村は年貢米の上納と助郷の賦役に苦しめられていた。甚兵衛は刈谷藩主に惨状を訴えたが、受け入れられないため、一大決心の上江戸に出向き幕府に嘆願し、ついに熱意を認められ15年間郷役を免除された。村民はその恩沢を忘れず、毎年甚兵衛祭を行って遺徳をしのんでいる。

